

平穏な日常をパレスチナの人々に



ジャーナリスト
古居みずえ

普通のOLだった古居みずえさんが、写真の世界に飛び込んだのは37歳のとき。その翌年に戦火のパレスチナを初めて訪れ、以来18年間、表に出ることの少ない女性たちを追い続けている。「いつも勢いで突っ走ってきた」と笑顔で語る姿からは、難病を患い絶望のふちに沈んだ過去など想像できない。

闘争の絶えない土地でどんな逆境にもめげずに強く生きる女性の姿は、常に古居さんのジャーナリスト魂を駆り立ててきた。彼女たちが望むのは何でもない穏やかな日常——その願いに少しでも応えられればと、初めてメガホンを取った映画「ガダーパレスチナの詩」は若い女性を中心に反響を呼んでいる。「ゴールはない」と小さな体で走り続ける古居さんは今、私たちに「真のパレスチナを知ってほしい」と強く訴える。(続きは55ページ)

「ありのままのパレスチナを知ってほしい」

ジャーナリスト

古居 みずえ

Furui Mizue

1948年鳥根県出身。アジアプレス・インターナショナル所属。88年に初めてパレスチナを訪れて以来、女性の生活に密着した取材活動を続けている。そのほかボスニア・ヘルツェゴビナ、ウガンダ、インドネシア、アフガニスタンで子どもや女性の生きる姿を撮影。『インティファダの女たち』彩流社、『パレスチナ 瓦礫の中の女たち』岩波書店)など著書・写真集多数。05年DAYS JAPAN審査員特別賞受賞。パレスチナ女性の日常を撮影・監督した映画「ガーダ パレスチナの詩」(<http://www.ghada.jp>)が現在日本各地で自主上映されている。



photos by Kamazawa Kyuya

37歳のときに首から下が徐々に動かなくなり、原因不明のリウマチと診断されました。1カ月後には歩行器なしでは歩けなくなって、これからは人の手を借りなければ生きていけないんだと思ったらむなしくて、それまで納得した生き方をしてこなかったことをすごく悔やみました。でも奇跡的に薬が効き回復したんです。それはもう高揚した気分になり「一度きりの人生、何か残したい」って強く思いましたね。そんなとき友人に写真を勧められ、祖父が写真関係の仕事をしていたこともあって、写真を自然と勉強し始めました。

パレスチナに出会ったのはそれから1年後のこと。ある写真展で、争いが絶えず、過酷な環境にしながら元気に笑う子どもたちの表情に感動し、自分もこういう写真を撮りたいと思いました。そしてカメラ片手に単身パレスチナに向かったのです。40歳にして初海外。でも自分は何だってできるという気になっていたの、銃撃戦だろうと何があるかと頑張るぞって意気込んでいました(笑)。

ヨルダン川西岸のナブルスでは、ある家族と生活を共にし、普段外に出ることの少ない女性が家の中で家族や暮らしを守っていることを初めて知りました。おおらかでたくましく生きる彼女たちに強くひかれ、それ以降は女性に密着した取材を続けています。今年5月には、ビデオカメラで17年間記録してきたパレスチナ女性の姿を一本のドキュメンタリー映画にまとめ劇場公開しました。

パレスチナという日本人は戦闘シーンばかりを想像すると思

ますが、実際に町を歩いてみると、活気に満ちた市場や勉強に励む学生などありふれた日常があります。それに義理人情の厚さや人の面倒見が良いところなど日本人と似ている部分もたくさんあるんですよ。ただ、パレスチナのことを知る日本人がどれほどいるでしょうか。時にはパレスチナ人みんながテロリストのように伝えられますが、既成のメディアだけに頼らず、真の姿を知ろうとする姿勢を日本の人たちに持ってほしい。

現在のパレスチナはかつてないほどに厳しい状況と言っていると思います。普通に生活していた人が、ある日突然、家を失うということが平気で起こっています。発電所が破壊され道路は封鎖され、水も満足に使えない。以前はイスラエルへ出稼ぎにも行っていました。今はまったくできず、大学や大学院を出ても雇用機会はありません。そして今年6月に始まったイスラエル軍侵攻で100人以上の犠牲者が出ています。しかも今はそのことがレバノン問題に隠れてしまっている。

物質的な支援も必要ですが、人々は今、この状況を引き起こしている原因を取り除き、安全で平穏な社会の訪れを強く願っています。ここまで事態が悪化すると当事者同士での解決は難しく、人々の願いに応えられるのは第三者である国際社会でしょう。そして国際社会を動かす力は世界中の市民がこの問題に関心を持つことにあります。日本人の間で関心が少しでも高まるよう、私はあらゆる手段でパレスチナの姿を伝え続けていこうと思っています。